

二 百丈野狐（百丈の野狐）

無門関 西村恵信訳註 岩波文庫より

百丈和尚の説法があると、いつも一人の老人が大衆の後ろで聴聞していた。そして修行僧たちが退場すると、老人もまた出て行くのであった。ところがある日、彼はひとりその場に居残って出て行こうとしない。そこで百丈が、「そこにいるのは誰か」と聞かれた。老人は、

「はい、私は人間ではありません。大昔、仏陀もまだこの世に出られない頃、この山に住んでいましたが、ある日弟子の一人が、「仏道修行を完成した人でも、やはり因果の法則に落ちて苦しむものでしょうか」と尋ねるので、「いや、因果の法に落ちることはない」と答えました。するとそれらしい五百生の長い間、わたしは野狐の身に墮ちてしまい、生まれ変わり死に変わりして今日に至りました。どうか私に代わって正しい答えとなる一句によってこの野狐の身から脱出させていただきたい」と頼んだ。

そして改めて、

「仏道修行を完成した人でも、やはり因果の法則に落ちて苦しむものでしょうか」と質問した。すると百丈和尚は、

「因果の法を味（くらま）さない」と答えられた。

その途端に老人は大悟し、百丈和尚に礼拝して言った。

「私は已（すで）に野狐の身を脱することができました。抜け殻となってこの山の後ろに

おります。どうか坊さん並みのお葬式を営んでください。」

百丈和尚は一山を取り締まる維那（いのう・役職名）に命じて衆僧を集めさせ、昼食の後に亡くなった僧の葬式を行うと告げた。大衆は「皆こうして元気だし、病気で臥せているものもないはずだが」と不思議に思いあれこれ噂した。食後になると百丈和尚は大衆を引き連れて裏山の岩窟の所に行き、杖を持って一匹の死んだ野狐を引っ張り出し、直ちに火葬に付した。

晩になると百丈和尚は威儀を整えて法堂の壇上に登り、昼間の出来事の一切を語って聞かせた。すると一番弟子の黄檗（おうぼく）が質問した。

「老人はその昔、答えを誤ったばかりに、五百生もの長い間野狐の身に転落したということですが、もし彼が常に正しい答えを出していたとしたら、一体その老人は何に成っていたでしょうか」。百丈和尚は

「ここへ来るがいい。あの老人のために言ってやろう」と言われた。黄檗は百丈和尚の側へ近寄ると、いきなり師の横っ面をぶん殴った。百丈和尚は手を拍（う）って笑い、

「達磨（だるま）の髭（ひげ）は赤いと思っていたが、なんとここにも赤髭の達磨がおったわい」と言われた。

無門は言う、「因果に落ちず」でどうして野狐に落ち、「因果を昧（くらま）さず」だと何故に野狐を離脱しうるのか。もしこの大切な一点を見抜く第三の眼を持つことができるならば、あの百丈山の老人もなんのことはない、実は五百生という長いあいだを風流の中に行きっていたんだと分かるであろう」。

頌（うた） って言う、

不落と不昧、

賽（さい）ひと振りに目が二つ。

不昧と不落

どんなに見ても勝ち目なし。

- * 「因果の法に落ちることはない」…因果の法則を超越できる。
- * 「因果の法を昧（くらま）さない」…因果の法則は厳然として存在する。
- * 「因果」…原因と結果の必然的關係。善因善果、悪因悪果は仏教の基本認識。
- * 「仏道修行の完成」…悟りを得て「仏陀」となること。仏陀になれば輪廻の法則を超越できることは、仏教の基本認識。だから老人は、常識的には正しい答えをしている。（基本前提を踏まえ、矛盾しない答えが求められている）
- * 「達磨」…禅宗の創始者。ここで百丈は殴られたにも関わらず喜んでいて。
- * 「第三の眼」…両眼以外の真実を見抜くための眼。この話のオカルト的な設定（老人が前世の記憶を持っている）は、話を進めるための仕立て。
- * 「ぶん殴る」…「無門は言う」「頌っという」…禅では、悟りへの覚醒を促すために肉体的暴力を用いたり、皮肉な物言いや、デイスった表現を用いる。